

1 研究課題名

被疑者・被害者等に対する面接手法に関する行動科学的研究

2 研究担当者

主担当者氏名 渡邊和美（犯罪行動科学部捜査支援研究室長）
他 10 名

3 研究期間

平成22年4月 ～ 平成26年3月（4年計画）

4 研究予算

平成22年度 18,111千円
平成23年度 16,532千円
平成24年度 16,610千円
平成25年度 15,065千円

5 研究の目的

警察が行う被疑者及び被害者等に対する面接について、我が国の法体系や文化に適した技術を実証的に検討し、警察が行う面接技術の行動科学的な基盤を確立する。

6 成果

(1) 当初予定していた成果

当初想定していた成果について、児童に対する面接、成人被害者に対する面接、被疑者に対する取調べのそれぞれについては、以下のとおりである。

【児童に対する面接】

日本における児童を対象とした客観的聴取のための面接方法について、一般児童を対象とした実験や、聴取を担当した警察職員、被害児童及びその保護者を対象とした質問紙調査の結果から、一定の知見を導き出すことができた。得られた知見は主として次のとおりである。

- ・日本の被害聴取は、欧米における司法面接とは異なり、1回の面接で聴取が終わる場合は多くないほか、保護者の立会いが多い（約9割弱）。
- ・捜査員は、被害児童との関係づくりを慎重に行っている一方、関係づくりに時間をかけすぎることの弊害も認識していた。
- ・司法面接で推奨されるグラウンドルール、オープン質問や促しの多用、暗示質問の回避の必要性は、概ね捜査員に認識されていた。しかし、児童の自発的な語りを引き出す質問（誘いかけ質問）よりも、WH質問の使用が多い傾向がうかがえた。
- ・捜査員からみた児童の供述は、情報量と特定性という2側面から評価できた。
- ・児童の供述量は、捜査員による促し、エピソードの語りの練習、立会人の保護者に

面接中の介入を避けるよう説明することで増大し、捜査員の捜査経験年数が短い場合に減少した。

- ・児童の供述の特定性については、グラウンドルールを説明したり、児童の理解力を確認するといった児童とのコミュニケーションに配慮することの重要性が示唆された。また、静かで集中できる場所等、聴取環境に配慮することの重要性も示唆された。

- ・児童の協力的態度には、立会人である保護者の情緒的なサポートの重要性が示唆された。

- ・誘いかけ質問は、クローズ質問に対して、同じ情報量を得るのに時間がかかるという問題点がある一方、記憶を歪めずに正確に答えさせることが可能であり、特に、年齢の低い児童（幼稚園児）でその傾向が強く認められた。

- ・ラポール段階で、捜査員がWH質問やクローズ質問よりも誘いかけ質問を用いる方が、その後の供述の段階で、児童から正確な情報をより多く引き出せる様子が、小学2年生の児童で認められた。特に、物理的特性、相手の行動、位置関係に関する情報でその傾向がみられた。

- ・グラウンドルールをまったく教示しないと、誤情報を含む質問に対して児童は自ら「分からない」と言えずに誤った回答をする傾向がみられた。一方、教示を多く行うと、児童は思い出そうとせずに安易に「分からない」と回答してしまうため、情報量が減る危険性が示された。

【成人被害者の面接】

日本における成人被害者に対する面接方法について、成人被害者及び面接を行った警察官を対象とした質問紙調査の結果から、一定の知見を導き出すことができた。得られた知見は主として次のとおりである。

- ・認知面接という言葉を知ったことがない警察官が7割であったが、認知面接の記憶喚起手法の一つである「全報告」を実施していた警察官は6割を示した。

- ・警察官の行った面接に最も高い評価をした被害者の群は、そうでない被害者の群と比較して、ラポール形成やグラウンドルールの説明、認知面接の記憶喚起手法（全報告、文脈の心的再現、異なる順序で報告、異なる視点で報告）を面接した警察官が行ったと報告する者が多かった。

- ・被害者に対する調査データのロジスティック回帰分析の結果、面接環境への配慮や全報告を求めることが、被害者にとって「よく聞いてもらった」と感じることに関連していた。

- ・警察官に対する調査データのロジスティック回帰分析の結果、被害者から得られる情報の有用性には、被害者の協力的な態度、プライバシーに配慮した場所、認知的に集中できる場所、聴取者の特性（共感的関心の高さ）が関連していた。

- ・警察官に対する調査データと被害者に対する調査データを統合して分析した結果、「十分に聞いてもらった」、「自由に話せた」、「覚えていることは全て話せた」という項目の全てで高評価をした被害者の供述は、被疑者の犯行内容の特定に役立ったと警察官が評価した者が多く、被害者が会話の主体となって報告することの重要性が指摘

された。

【被疑者の取調べ】

日本における被疑者に対する取調べについて、取調べ官に対する質問紙調査の分析、取調べを経験した受刑者を対象とした質問紙調査、一般人を対象とした模擬取調べ実験の多面的アプローチにより、一定の知見を導き出すことができた。得られた知見は主として次のとおりである。

- ・取調べ官に対する質問紙調査データの分析から、取調べ手法は、証拠の提示、対抗、積極的傾聴、関係構築、事件の話題の5因子に分類可能であり、多くの取調べ官が積極的傾聴や事件の話題、関係構築を用いていた。

- ・取調べ手法の使い方によって取調べ官を分類したところ、証拠重視のアプローチ、関係重視のアプローチ、対抗アプローチ、未分化アプローチの4群に分類できた。

- ・関係重視のアプローチがなかなか自白をしない被疑者を自白に導くのに有効であったのに対し、証拠重視のアプローチでは被疑者が部分自白をする傾向が高かった。

- ・成人男性に対して行ったデセプションを含む実験パラダイムによる模擬取調べ実験のデータ分析から、有罪群の自白に人間関係重視のアプローチが関連していることが示された。

- ・関係重視のアプローチ、証拠重視のアプローチ、コントロール群（全報告を求めた後、ルール違反をしたかどうかを聴く）の3群を用いて実験を行ったところ、先行研究では6%から43%に虚偽自白が認められていたが、本研究ではいずれの群でも虚偽自白は認められなかった。

- ・実験の参加者は、関係重視アプローチの取調べ官をより好ましいと感じていた。

- ・面接中に自白をしなかった参加者について警察官に有罪か無罪かの予測を求めた結果、取調べ方法に関わらず、警察官の約9割が正しく予測した。中でも関係重視のアプローチで有罪群・無罪群ともに正しく推定する割合が最も高かった。

- ・受刑者に対する質問紙調査の分析でも、取調べ官対象の調査で利用した5因子を分析した。その結果、多くの受刑者が取調べ官と同様、積極的傾聴や事件の話題、関係構築を用いていたと回答した。

- ・取調べ官の調査と同様、取調べ手法の使い方によって分類したところ、証拠対抗のアプローチ、関係重視のアプローチ、多面的アプローチ、未分化のアプローチの4群に分類できた。

- ・受刑者の取調べ前の自白の意図によって、取調べ手法の自白への影響が異なっていた。取調べ前に自白すると決めていた受刑者では、取調べ手法による自白の差はみられなかった。一方、取調べ前に自白すると決めていなかった受刑者あるいは否認すると決めていた受刑者では、関係重視アプローチと多面的アプローチの場合に自白する傾向が高かった。

- ・関係重視アプローチを経験した結果自白した受刑者は、自らの自白に満足する傾向が、他のグループの受刑者と比較して高かった。

- ・被疑者の取調べ場面において、対象者の知的障害等の脆弱性に気づき、必要とされ

る配慮を行うことを可能とするために、国立精神神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学部の医師の協力を得て科学警察研究所が開発した知的障害のスクリーニングを行うための簡易心理検査をタブレット上で実施できる心理検査キットを開発した。

(2) 当初予定していなかったが副次的に（あるいは発展的に）得られた成果

警察庁少年課が作成した児童に対する客観的聴取技法に関するマニュアルに、本研究で行った文献研究や、国内外の関連機関調査、面接調査の結果を反映させることができた。また、警察庁刑事企画課が作成した教本「取調べ（基礎編）」に、本研究までに行ってきた研究知見や文献研究、国内外の関連機関調査の知見を反映させることができた。また、本研究の知見は、引き続き発表していく予定であるが、これらは警察大取調べ技術総合研究・研修センター及び刑事企画課が作成する教養資料にも反映される予定である。

(3) 当初想定していたが得られなかった成果

特になし。

7 成果の発表

(1) 論文・総説・著書 (Publication to academic journals)

- 1) Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., et al. (2014). Police interviewing styles and confessions in Japan, *Psychology, Crime and Law*, 20, 673- 694.
- 2) Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., et al. (under review). Japanese interrogation techniques from prisoners' perspectives.
- 3) Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., et al. (under review). Japanese suspect interviews, confessions, and related factors.
- 4) Wachi, T. and Watanabe, K. (in press). Current Practice of Japanese Interrogation. In D. Walsh, G. Oxburgh, A. Redlich & T. Myklebust (Eds.), *International developments and practices in investigative interviewing and interrogation: Volume II: Suspects*. Routledge Press.
- 5) 和智妙子 (2011). 被疑者が知的障害者である場合の取調べ、捜査研究、723、8月号、2-16.
- 6) 高村茂, 横田賀英子, 渡邊和美, 他 (訳). (2011). 『認知面接—目撃者の記憶想起を促す心理学的テクニック—』, 関西学院大学出版会, Ronald P.Fisher and R. Edward Geiselman (Eds.), 1992, *Memory-Enhancing Techniques for Investigative Interviewing: the cognitive interview*, Charles C. Thomas Publisher.
- 7) 和智妙子 (2011). 取調べ, 越智啓太, 藤田政博, 渡邊和美 (編). 『法と心理学の事典—犯罪・裁判・矯正—』, 朝倉書店, 332-333.

- 8) 和智妙子 (2011). 否認の心理, 越智啓太, 藤田政博, 渡邊和美 (編). 『法と心理学の事典—犯罪・裁判・矯正—』, 朝倉書店, 334-335.
- 9) 和智妙子 (2011). 虚偽自白, 越智啓太, 藤田政博, 渡邊和美 (編). 『法と心理学の事典—犯罪・裁判・矯正—』, 朝倉書店, 336-337.
- 10) 渡邊和美 (2012). 司法における犯罪者・被害者等に対する面接, 国際犯罪学会第16回世界大会報告書, 76.

他原稿作成中 4 本

(2) 学会における口頭発表 (Oral presentation at the academic meeting and conference)

- 1) Wachi, T., Yokota, K., Otsuka, Y., et al. (2011). Japanese police officers' feelings and beliefs after interrogation, 4th Annual conference of the International Investigative Interviewing Research Group, Programme and Abstracts, 32.
- 2) Wachi, T., Watanabe, K., Yokota, K., et al. (2011). Police interviewing styles and confessions in Japan, 4th International Congress on Psychology and Law, 60.
- 3) Otsuka, Y., Wachi, T., Watanabe, K., et al. (2011). Factors that determine the level of confession in denying suspects, 4th International Congress on Psychology and Law, 46.
- 4) Miyadera, T. (2012). Police investigative interviews of child victims in Japan, The 28th National Symposium on Child Abuse, Program, 27.
- 5) Watanabe, K., Miyadera, T., Yokota, K., et al. (2012). The methods used by the Japanese police for interviewing victims, 5th Annual conference of the International Investigative Interviewing Research Group, Programme and Abstracts, 27.
- 6) Kuhara, E., Miyadera, T., and Kobayashi, J. (2012). Investigative technique of Japanese police for use in interviewing sexually abused children, The American Professional Society on the Abuse of Children the 20th Annual Colloquium, Abstract, 19.
- 7) Otsuka, Y., Watanabe, K., Miyadera, T., et al. (2013). What determines the quality and informativeness of investigative interviews with victims? : Findings from the national survey of the Japanese police, The European Association of Psychology and Law (EAPL) 2013 conference.
- 8) Wachi, T. (2014). Japanese interrogations and confessions. American Psychology-Law Society Annual Conference 2014, 94.
- 9) 渡邊和美 (2011). 司法における犯罪者・被害者等に対する面接 (シンポジウム「司法における犯罪者・被害者等に対する面接」), 国際犯罪学会第16回世界大会, The book of abstracts, 79. 犯罪心理学研究, 第49巻特別号, 124-125.
- 10) 宮寺貴之 (2011). 子どもの被害者に対する捜査面接 (シンポジウム「司法における犯罪者・被害者等に対する面接」), 国際犯罪学会第16回世界大会, The book of

abstracts, 80.犯罪心理学研究, 第49巻特別号, 128-129.

- 11) 和智妙子 (2011). 日本における取調べ (シンポジウム「司法における犯罪者・被害者等に対する面接」), 国際犯罪学会第16回世界大会, The book of abstracts, 80. 犯罪心理学研究, 第49巻特別号, 130-131.
- 12) 和智妙子, 横田賀英子, 大塚祐輔, 他 (2010). 取調べ手法と取調べ官の個人要因の検討, 犯罪心理学研究, 第48巻特別号, 122-123.
- 13) 和智妙子, 倉石宏樹, 大塚祐輔, 他 (2011). 実験パラダイムを用いた取調べ手法の検討—関係重視アプローチに着目して, 第17回日本法科学技術学会, 第16巻別冊, 171.
- 14) 宮寺貴之, 渡邊和美, 久原恵理子, 他 (2012). 被害児童に対する捜査面接における面接手法の検討, 日本犯罪心理学会第50回大会, 犯罪心理学研究, 第50巻特別号, 62-63.
- 15) 渡邊和美, 宮寺貴之, 横田賀英子, 他 (2012). 犯罪被害者に対する面接手法と警察官の性格特性との関連, 日本犯罪心理学会第50回大会, 犯罪心理学研究, 第50巻特別号, 58-59.
- 16) 久原恵理子, 宮寺貴之, 小林寿一, 他 (2012). 性犯罪の被害児童に対する警察の聴取について—関係作りに着目して—, 日本犯罪心理学会第50回大会, 犯罪心理学研究, 第50巻特別号, 66-67.
- 17) 宮寺貴之, 渡邊和美, 久原恵理子, 他 (2012). 警察の捜査面接に対する被害児童と保護者の認識, 日本心理学会第76回大会, 発表論文集, CD-ROM, 2EVD17.
- 18) 渡邊和美, 宮寺貴之, 横田賀英子, 他 (2012). 警察の捜査面接に対する成人被害者の認識—全国の成人被害者に対する質問紙調査—, 日本心理学会第76回大会, 発表論文集, CD-ROM, 2EVD18.
- 19) 和智妙子, 倉石宏樹, 大塚祐輔, 他 (2012). 取調べにおける面接者の認識—実験パラダイムを利用して—, 日本心理学会第76回大会, 発表論文集, CD-ROM, 2EVD20.
- 20) 倉石宏樹, 和智妙子, 横田賀英子, 他 (2012). 取調べにおける不安感, 日本心理学会第76回大会, 発表論文集, CD-ROM, 2EVD19.
- 21) 宮寺貴之, 久原恵理子, 藤原佑貴, 他 (2012). 児童に対する面接における異なる質問タイプの効果の検討, 第49回日本犯罪学会総会, 総会抄録集, 15.
- 22) 渡邊和美, 横田賀英子, 小野修一 (2013). 支援的な関わりと信頼関係の認識—犯罪被害者と捜査面接を行った警察官に対する質問紙調査の分析—, 日本心理学会第77回大会, 発表論文集, 454.
- 23) 宮寺貴之 (2013). 被害児童に対する捜査面接, シンポジウム「司法・福祉場面における子どもへの面接: 司法面接—証拠的価値をもつ情報の収集—」, 日本発達心理学会第24回大会, 大会プログラム, 23.
- 24) 宮寺貴之, 渡邊和美, 久原恵理子, 他 (2013). 被害児童に対する捜査面接—, 日本犯罪心理学会第51回大会, 大会プログラム, 28.
- 25) 藤原佑貴, 宮寺貴之, 久原恵理子, 他 (2013). ラポール形成時の質問方法が児童の

話す情報に与える影響, 日本犯罪心理学会第51回大会, 大会プログラム, 28.

- 26) 渡邊和美, 和智妙子, 横田賀英子, 他 (2013). グッドジョンソン被暗示性尺度2 (GSS2) の検討, 日本犯罪心理学会第51回大会, 第51回大会プログラム, 26.
 - 27) 横田賀英子 (2013). 捜査面接において面接者に求められる特性について—大学生対象の質問紙調査からの一考察—, 日本法科学技術学会第19回学術集会, 法科学技術18 (別冊), 140.
 - 28) 久原恵理子, 宮寺貴之, 藤原佑貴, 他 (2014). 児童に対する聴取面接におけるグラウンドルールの影響について, 日本犯罪心理学会第52回大会, 第52回大会プログラム, 37.
 - 29) 宮寺貴之, 久原恵理子, 藤原佑貴, 他 (2014). 児童対象の聴取面接—自由語り後の質問への回答と関連する要因—, 日本犯罪心理学会第52回大会, 第52回大会プログラム, 38.
 - 30) 宮寺貴之, 久原恵理子, 藤原佑貴, 他 (2014). 児童に対する司法面接における質問タイプ別の項かの検討, 子ども虐待防止世界会議名古屋2014, 抄録集, 155.
- (3) 招待講演 (Invited oral presentation at the academic meeting and conference)
なし